

「教職ピアノ実習」で育まれるピアノ演奏力：グループプレッスンを通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神野, すなほ, 鈴木, 由紀子, Jinno, Sunao, Suzuki, Yukiko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/760

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「教職ピアノ実習」で育まれるピアノ演奏力

ーグループレッスンを通してー

神野すなほ 鈴木由紀子

Sunao Jinno, Yukiko Suzuki

1 はじめに

「教職ピアノ実習」とは、教員免許を希望するピアノ専攻以外の学生が、4年次になって教育実習へ行ったときに滞りなく授業実習ができるように、卒業後、教職に就いた際には教職ピアノ実習で学んだことが実践で役に立てられるようにと、1年次からプログラムを順序立てて考えられた授業である。ピアノの苦手な学生を上達させる手ほだきをするという目的と、歌唱伴奏を通して音楽の素晴らしさ、楽曲の持ち味を学生自身が感じ、感じたことを人に伝える力をつけさせることを目指している。

洗足学園音楽大学では、実際の教育現場では40人の生徒の歌の伴奏をしなければいけないということを想定し、コミュニケーション力も身に付けられるよう、講師と学生がマンツーマンで行うのではなく、グループ授業を行っている。



写真1 グループ授業風景

入学後2年次まで、初級、中級、上級と3つのクラスに分け、それぞれの力に見合った歌唱伴奏の教材を使い、3年次ではそれまでのクラス分けをなくし、合唱曲の教材を加えて、教育実習を見据えた実

実践的な授業内容となる。このようにして皆が4年次の教育実習に向けて進んでいくのであるが、そこでの問題点、留意点、今後の解決に向けて考えを書き留めることにする。

2 1・2年次の授業

中級クラスには初級寄り、上級寄りの学生が混在されているため、ここでは差がはっきりと分かるよう、初級クラスと上級クラスについて書き留める。

2-1 初級クラスの現状：マナー

筆者は、音楽大学で学ぼうという人たちは、当然、卒業後の進路も音楽に関わる仕事に就くことを希望しているのだらうと思っており、幼少期にピアノを習っていたり、細く長くピアノのレッスンを受けていたり、レベルは様々でも簡単な曲は弾けるものだと思っていた。しかし、この「教職ピアノ実習」の初級クラスを持った時に、その考えは全く間違っているという現実を知った。音楽大学には様々な専攻があり、いわゆるクラシックと言われる楽器の専攻もあれば、クラシックとは正反対のジャンルの専攻もある。この授業で初めてピアノの前に座ったという学生も少なくはない。

「教職ピアノ実習」初級クラスにいる1年次の学生には、先に述べたように初めてピアノに触る学生と、幼少期に少しばかり習ったことがあるという学生が混ざっている。幼少期に数年でも習ったことがある学生は、一通り、ピアノ演奏時のマナーは身に染みているように感じられる。

初めてピアノに臨む学生を見て、筆者が驚いた点をすべて挙げる。

①椅子への対応

学生たちはピアノに対してどこに椅子を構えればいいのかかわからず、はじめ、なんとなく88鍵のおおよそ真ん中に椅子を置き、座るが、どこのドが1点ハのドなのか分かっていない。高い音が続く曲の時には椅子を右（高音の方）にずらし、ヘ音記号の多い曲は反射的に椅子を左（低音の方）にずらす。

また、椅子の高さを変えたいとき、レバーの動かし方がわからず、ロックを解除し、高さを変えた後、またロックを掛けるという作業が初めてである。

②演奏時のマナー

ピアノ椅子は浅めに座るというマナーを知らず、深く座り、椅子の背もたれにもたれて座る。また、男子学生に限らず、女子学生も大股を開いて座っており、こちらが驚く。教育実習でそのような行儀では教える立場として問題があること、今後使うペダル使用に備えて、そのような姿勢ではいけないことを説明する。

ピアノ演奏は長い爪では弾けないことを知らない。例えばクラシックギターなど、爪を伸ばさなくては楽器が弾けない専攻もあるが、女子学生はファッションで爪を伸ばしていることがよくある。鍵盤と鍵盤の隙間に爪が挟まり怪我への危険性や、爪を気にして指を立てずに寝かせて弾くことは音量が出ないこと、手首が下がることによって、右手は上向形、左手は下向形の時に1指をくぐらせる空間がなくなってしまうこと、なによりも演奏中、常にカチカチと爪が鍵盤に当たる音はたいそう邪魔な雑音であることを説明する。

③コミュニケーション力

多くの学生は、声が小さく、積極的ではない。自分は初心者なのだというピアノへの自信のなさからこの授業の時だけ消極的になっている可能性も大きいと推測するが、質問を投げ掛けても自分の考えがうまく文章にならないことが多く、表情も乏しくコミュニケーションが取りにくい。教員になった時には、生徒たちの意見を教員が引き出し、活気あるクラスに導かなくてはいけないことを説明している。

以上が、音を出す前の段階で、筆者がピアノ初級者に驚かされた点である。大学生なので理解はすぐできるが、大腿を開く椅子の座り方や、爪の長さ、覇気がなんとなく感じられない点は、日常の行動が本人に沁みこんでいるため、何度も注意される学生も多い。

2-2 初級クラスの現状：演奏能力

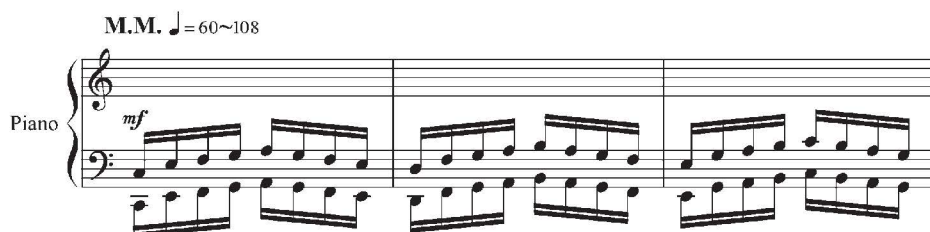
歌唱伴奏とは、主役は歌唱であり、伴奏者が弾き直しをしたり、音楽の流れを止めたりすることは許されない。歌唱に限らずどの楽器の伴奏でも言えることである。どのような状況になっても旋律だけでもバスの音だけでも音を出して、伴奏として機能させなくてはならない。それには、きちんと曲を理解していること、正確な運指で弾き慣れて、ミスをしないう心がけをすること、もしミスをしたとしても何としても曲を止めずに音をつなげていくのだという、強い気持ちが必要である。

譜面台に楽譜を開き、楽譜一面が黒くて驚くことがある。音符すべてに片仮名でイタリア音名を振っている。音符を読むのはイタリア音名を振る時だけ、あとはその片仮名を読んでいると知った時には愕然とした。「ド」といっても 88 ある鍵盤には「ド」が 8 つあり、振り仮名を読んでいたのは高さが間違っていたとしても、本人は何も気付いていない。読譜は日々の地道な訓練で、読もうと心掛けを続ければ必ず早く読むことができるようになる、と説いてはいるが、決まっている試験日に試験範囲を間に合わせるためには仕方がないことかとも感じる。夏休みなど、長期休暇の時にどれ程学生自身が心掛けられるかに依るであろう。

学生が自主的にハノンを何曲か弾いてきたことがある。テンポも良く、両手もよく揃っており、この学生は初級クラスでは物足りないのではないかと思ったほどよく弾いていた。

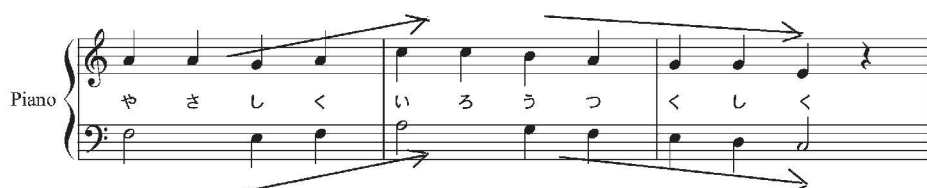
ハノンは両手が同じ音、同じ音程で推移していくため、難なく弾くことができたのだということが「教職ピアノ実習」の教材を始めてすぐに分かった（譜例 1）。

譜例 1 《ハノン 1 番》



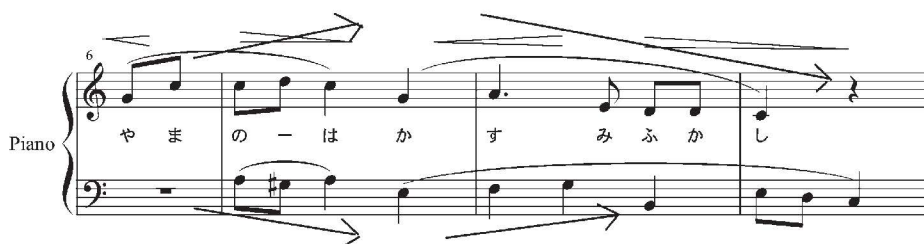
両手が違う動きをすること、それがたとえ片方が休符であっても、全音符であっても、両手が別々の動きをすることは難しいと学生たちは言う。音の進行面からみると、並進行はどちらかという弾きやすく、反進行は指を動かす前に思考を要し、ますます力みが入って指が動かなくなるという悪循環を起こしやすい。譜例2は並進行の例である。

譜例2 《春の小川》(尾形敏幸 編曲)



譜例3は反進行が含まれた例である。

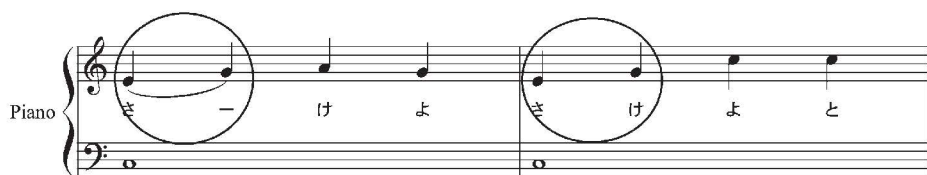
譜例3 《おぼろ月夜》(尾形敏幸 編曲)



ハノンのように並進行の曲ばかりではないため、片手練習を何度も繰り返し、右手と左手が独立して指が動くように根気よく練習する。その時に、運指はいつも同じにしておかなくてはいけない理由を説明する。初級者は我々が驚くような運指をしてくる。運指1つで曲が簡単にも難しくもなり、毎回違う運指では違う曲を練習していることと同じであると、何度も説明するが、鍵盤に不慣れな彼らには打鍵の感覚も、音程の感覚もないため、運指を定めることは一苦勞である。1つの運指を変えることによって、定まっていたその前後のフレーズまで崩れてしまうことも多く、それを恐れて運指を注意できない箇所もある。

3度の音程を1指から2指へと運ぶことは、その後の音の動きから見ても自然なことである(譜例4)。初級者には指間を広げる、音の流れから効率的な指使いをするという意識がまだないため、3度の音程を1指から3指へと運んでしまい、その後にある4度の音程でレガートができなくなる。

譜例4 《春の小川》（尾形敏幸 編曲）



初めて和音が出てくると、新たな問題点が見つかる。譜例5のように、それぞれの音が隣の音への移行にも関わらず、隣の指を使わず、すべてに同じ指（5指と1指の場合が多い）を使い、力が入り、ミスタッチをする。5本の指を効率よく、くまなく使うことを指導するが、指はそれぞれ長さが違い、和音となると手首の高さまで変化してしまうこと、4指は特に両手とも指先に意識を持って弾くことが難しい様子であり、正しい運指に合う手の姿勢をチェックする。

譜例5 《こきりこ節》（伊藤康英 編曲）

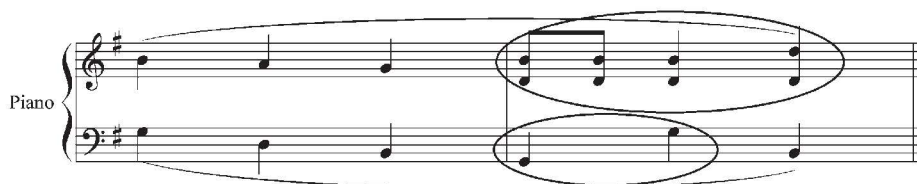


ずっと5本の指を閉じて固まって弾いており、指間を開く発想がないため、単音から和音を掴むことも難しい。譜例6の左手のように1オクターブの推移、右手の6度の和音、1オクターブの和音は、弾くことに慣れていない学生は鍵盤の手前からアプローチしようとする傾向がある。鍵盤の上から、物を掴むようにアプローチするよう説明するが、手、指に力が入っていることもあり、なかなか思うように、自由に指が開かない現実がある。

初級者は弾くときに体中とても力が入っている。両肩は上がり、深く呼吸ができていない状態で、弾いている最中、力を抜いてと声掛けをし、上がった肩に手を置き、本人が力みに気付いてもらえるように心掛ける。

五

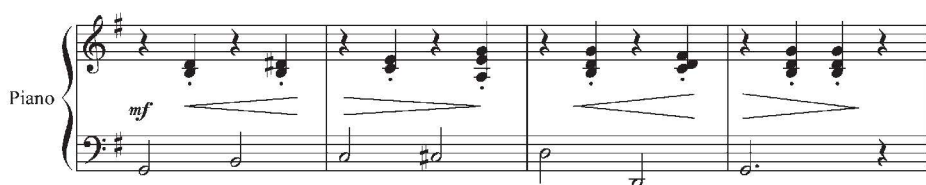
譜例6 《うみ》（滝口亮介 編曲）



次に、力みがあるとできない表現がスタッカートである(譜例7)。

短く切るということが、腕全体に力が入っているためできず、音が重く、長い。短く切るには勢いが必要ようであり、上から手を放り投げるように音を出す。当然、びっくりするような大きな音が出る。体の力を抜くだけでなく、きもちの面でも余裕が持てるようにならなければスタッカートはできない。因みに、面白いことに、電子ピアノで練習している人はスタッカートができない傾向にある。それは今まで各地で述べ数百人という人数のこどもたちをレッスンして気付いた結果である。スタッカートは打鍵の仕方によって音の残響がコントロールできるアコースティックのピアノならではの表現であり、授業でアコースティックを学生に触らせ、様々な打鍵法を経験できることは学生にとってとても大切なことであると実感している。

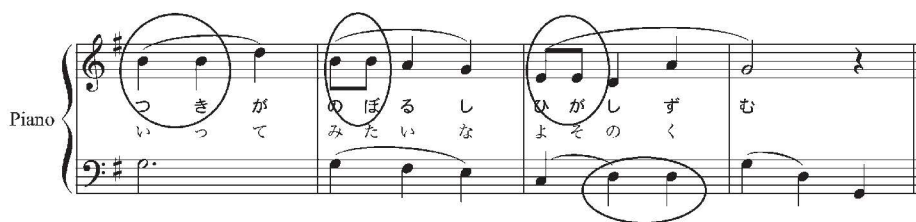
譜例7 《茶つみ》(生野裕久 編曲)



力みがあるとできないもう一つのテクニックは連打である(譜例8)。同じ音を弾く場合、次の音を出すために、押した鍵盤を一度解放して上まで戻さなくてはならないが、体中に力が入り腕や手が重くなり、鍵盤が上まで戻らない状態になってしまう。

力を抜くには、自然な運指をすること、自信につなげられるまで片手ずつよく練習し鍵盤に慣れること、そして指導者の「楽に楽に」との声掛けだと感じている。

譜例8 《うみ》(滝口亮介編曲)



ペダルに関しては、幼少期に少しレッスンを受けた学生でもこの授業で初めて使用するということが多く、まずはかかとを床につけて、かかとを支点に足裏の上部で踏んだり上げたりすることから説明をする。左手とペダル、右手とペダルというように少しずつ経験をし、きれいな響きと濁ってしまった響きを学生自身が聴き分けられるように耳の訓練をしながらペダル踏み変えのタイミングを身に着ける。ペダルを付ける余裕がない学生もあるが、「ペダルが踏める」という前進は、初級者にとって大きな自

信と喜びになっているように感じる。

「教職ピアノ実習」では、前奏の最後、歌唱が入るところでアインザッツ（歌い始めのサイン）を入れることを推奨している。教育実習で歌唱伴奏をしたときに、何十人もの大勢の学生たちに「ここから歌いましょう」と自然に歌を促すことができるようにするためである。初級の学生たちは楽譜、もしくは鍵盤を凝視したままの状態で、とても大勢に聞こえるような、コミュニケーションの取れたアインザッツを入れることはまだまだ難しいが、3拍子、4拍子など、拍子によって変化するアインザッツの入れ方は、練習を続けていけば慣れるようになってきている。アウフタクトの曲へのアインザッツは、特に注意をするようにしている。グループ授業であることを活かして、1人の学生に伴奏をさせて残りの学生で合唱をするということもしている。弾くことにも気持ちにも余裕のない学生たちは緊張してしまって、間違えずに弾くことはとても難しく、伴奏として成り立たないことが多いが、そのような緊張にも慣れることが必要である。

初級者について感じることは、まずは練習をするしか術はないということである。1週間に1日だけ、まとめて2時間練習をするのであれば、毎日15分ずつ鍵盤に触り、打鍵の感覚、和音を掴んだ感覚、ペダルを踏んだときの足の感覚、両手両指が動くという感覚、すべて慣れることによって「弾くこと」が体に染み入り、次第に体と頭の緊張が解け、力が抜け、やっと余裕が生まれるものだと思う。日々の積み重ね、それに限る。入学後、この授業でピアノを初めて触った学生の中には、試験に不合格したことを機に履修をやめる学生も実際にいる。専攻楽器の練習時間も必要な中、ピアノの練習ばかりに時間を費やすわけにもいかず、限られた時間内の練習では思うように両手が動かないことに限界を感じるのだと思う。初級クラスは試験の課題を追うだけで授業時間が精いっぱいであるが、できるならば、学生がもっと鍵盤に慣れるように、延いてはもっと練習するように、バイエルやツェルニー100番など、短い曲の教材も併用したいところである。何故なら、日頃運動しない人が運動を続けると筋力、体力がどんどんアップすることと同じように、ピアノ初級者は音符を読めば読むほど読譜が早くなり、運指の組み立て方もうまくなり、両手が自由に意識しなくとも動くようになるからである。

2-3 上級クラスの現状

上級者は幼少期から長くピアノレッスンを受けた学生、受け続けている学生が多く、ピアノを練習するという習慣がある。弾ける楽しさも知っている。「教職ピアノ実習」の課題は、すぐに弾けてしまうため、学生に理論的なことを考えてもらおうと、授業では課題を移調して弾かせることをしている。将来学生が授業をする立場になった時、変声期などで生徒たちの声が楽譜通りの音ではうまくいかない時もあるだろうと考え、楽譜の調から2度、3度の上下への移調は臨機応変に対応できた方が好ましいだろうと考えるからである。初めは慣れず、片手ずつ移調していた学生も、慣れれば1回目から両手で移調ができるようになる。短調の曲の場合は、臨時記号などの対応も何となくの音感でこなすことができるようになる。課題だけではすぐに弾けてしまって物足りない上級者には、このような頭を使わせることをし、それが弾きこなせたときにとても満足感を感じるようである。

立って弾く練習、立って弾き歌いをする練習もするようにしている。立ってペダルを踏むことに、踏ん張る左足がピリピリと痛い、腕の高さが合わなくて弾きづらいなど初めは声上がるが、慣れた時に

はますます弾くことへの余裕が生まれている。アインザッツの時には目線を楽譜から離し顔を横に向けられる練習もする。合唱する大勢の生徒たちが気持ちよく歌えるように、コミュニケーションのとれたアインザッツをしてほしいと考える。上級者には、どれほど手を開けば1オクターブがとどくなど、音程の感覚がしっかりと手に覚え込まれているので、視線が鍵盤になくとも、楽譜になくとも、ミスタッチすることなく伴奏をすることができる。そして演奏にも気持ちにも余裕があることから、アインザッツの声も大きく積極的である。

弾けてしまうが故に、上級者ならではの困った現状もある。歌唱伴奏の授業であるという目的を忘れ、自分の腕の見せ所と言わんばかりに歌唱伴奏をすごく速いテンポで弾いてくる学生が多い。「こんなに速くてはとても歌えない、歌のことを考えて、歌いやすいテンポを決めてから弾き始めるように」と注意するのであるが、ミスなく弾き通した自身の演奏について、注意をされたことに気分を害してしまった学生もいる。演奏技術を披露する授業ではなく、あくまでも伴奏の授業であるということ、メインは歌唱であることを認識させなくてはいけない。

せっかくのグループ授業であるということ、課題が早く終わり時間的余裕があることを活かして、上級クラスではペアを組んで連弾を取り入れている。ソロのピアノは幼少期からたくさんレッスンを受けていても、連弾を経験した学生はほとんどいなかった。モーツァルトの連弾のソナタであったり、チャイコフスキーのバレエ曲であったり、ペアの力によって曲の難易度は変えているが、いつも心掛けることは、1人に2曲与え、1stパートと2stパートを1曲ずつ担当させるようにしている。旋律パートと伴奏パートを経験させ、旋律を美しく響かせる伴奏とのバランスを耳で掴んでほしいと期待してのことである。学生たちは連弾をととても喜び、よく練習してくる。ペアで息を合わせて練習をするのも新鮮なようであるし、自分がとちると相手に迷惑がかかることも身を以て体験でき、歌唱伴奏にも通じるものがあると筆者は思っている。数回のレッスンをした後に、仕上げとして全員の前で発表会をし、緊張して演奏し、大きな拍手をもらって連弾は終える。

3 3年次の授業

3-1 授業内容

「はじめに」で述べた通り、3年次では、級の枠をなくし、今まで以上に教育実習を意識した授業内容となる。2年次で勉強した14曲から7曲の弾き歌いと、実際に中学・高校の授業で扱っている合唱曲の伴奏が課題となる。合唱曲の課題の中には、イタリア歌曲、ドイツ歌曲も含まれており、これらは原語で歌うことが求められている。合唱曲は20曲の選択肢の中から、試験では前期・後期とも3曲を選択することになっているが、全ての曲に目を通し、弾けないまでも歌えるように準備をしておかなければならない。

試験において、時に2年次まで初級に在籍していた学生と中・上級に在籍した学生との演奏の出来不出来に、差がつかないことがある。これは3年次での授業の目的が、すべての音を楽譜通り弾く正確さよりも、音楽が心地よく流れて、合唱のプレスなどを聴きながら、曲に沿った伴奏が弾けること、弾き歌いに関しても伴奏の難易度よりも大きな声でしっかり歌えることにあるからかもしれない。歌唱伴奏

の表現が生徒たちに伝わることを目指しているのだが、表現するという意味では本科（主科）と同じである。上級だった学生の中には音を省くということに抵抗があり、2-3でも述べた通りミスなく速いテンポで弾けることに満足を感じ、あるいは難しい曲を選択することに意味があるというような思い違いをしていることもある。

実習では、生徒たち皆を歌わせなければならないのだが、生徒たちに何を伝えたいか、それが相手に伝わるように大きく、時には大袈裟なくらい表現してみせる必要がある。そして生徒たちが楽しく授業を受けているかどうかという点も大切な要素である。楽しく心を開いて歌わせるには伴奏者の表情も柔らかく、歌い手のことを常に気を配る必要があるということを、3年次でも改めて認識させないといけない。

3-2 弾き歌い

弾き歌いの試験の課題に出されている7曲は、すでに2年次で伴奏部分はマスターしているはずなのだが、歌詞の意味を理解し、伴奏も音楽の流れに沿って弾けていないと、伴奏が止まり、歌い続けることができなくなる。弾き歌いでは、伴奏を練習するよりも、まず歌詞を暗記して歌えるようにした方が確実に上達する。歌詞を暗記する段階でようやく歌詞の意味を理解する学生も多いが、歌詞の意味を理解する事により伴奏の表現の幅も広がるのである。また、弾き歌いでは、大きな声で、曲想に沿った歌い方をしないとイケない。これは教育実習の際、指導者がまず範唱して生徒たちに歌わせるということが必要となるので、しっかり学習しなければならない。

3-3 合唱曲

3年次で初めて課題となる合唱曲は、2年次までの20小節程度の歌唱曲とは異なり、混声3部の曲、50～90小節ほどの曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、と曲の幅が広がってくる。先にも述べた通り試験では数ある課題の中から各自3曲を選択して伴奏の準備をするが、選択しなかった課題に関しても目を通し、歌えるようにすることとなっている。

筆者の授業では、毎回1曲ずつ先生役の学生を決めて、各曲の主旋律を弾いてもらい全員で音とりをすることにしている。その場合、左手あるいは足で拍をとり、アインザッツの他にも休符後に歌が入る時には合図を出すよう指導している。これは、授業内での生徒役が音大生であるのに対し、実際の現場では必ずいるであろう音価を理解していない生徒を想定してのことである。

合唱曲の教科書を見てみると、運指が書き込まれていない。よく弾ける学生でも毎回違う運指で弾いてくることが多い。2-2でも説明したが、運指をまず決めてから練習すると長い時間を要せずにその曲がスムーズに弾けるようになる。毎回違う運指で弾いていると、試験で緊張した途端間違える危険性が高くなる。教育実習に限らず教育現場では、やらなくてはならない仕事、雑務がたくさんあり、伴奏の練習ばかりしていられない状況の為、短時間で仕上げる必要がある。易しそうに思える曲も念のために運指を書き込んでおくと、いつでも安心して弾けるのである。合唱曲伴奏では、その上で、曲の雰囲気、ニュアンスの変化、歌のプレスなどに気を配り演奏しないとイケない。

筆者が見学した中学校での研究授業で、教材として、3年次で勉強した曲をとりあげていたことがあ

る。授業内容はしっかり練られていたのだが、実習生の伴奏による合唱の際、生徒たちの歌への聴き方が不十分で、急ぎ気味の伴奏になってしまっていた。その実習生は、3年次の時に筆者が「教職ピアノ実習」を担当した学生であり、一年前にはよく弾けていたという記憶があったので期待したのであるが、残念であった。大学の授業では、伴奏を聴き、伴奏に合わせて歌うことのできる音大生が生徒役として歌うので、歌と伴奏がずれるという現象はほとんど無く、歌をよく聴きながら伴奏するということの重要性和難しさをさほど感じたことはなかったが、改めて考えさせられた。

4 教育実習終了後の変化—アンケート調査より

教育実習を終えた学生及び卒業生 60 名（1,2 年次での級は、初・中級 30 名、上級 30 名）を対象に、3 年間の「教職ピアノ実習」の授業に関するアンケートを 2017 年 7 月～8 月上旬にかけて実施した。

アンケートの質問事項は以下の通りである。

アンケート 1：ピアノ伴奏の技術の向上を感じたか。

アンケート 2：教科書に載っている曲を勉強して良かったか。

アンケート 3：グループ授業という形態について

3-1：アインザッツをスムーズに出すことができるようになったか。

3-2：グループの中で刺激を受けたか。

アンケート 4：実習の時に生徒の前で弾き歌いができたか。

アンケート 5：授業や試験の経験で自信をもって実習にのぞめたか。

アンケート 6：実習で簡易伴奏をつけることができたか。

これらのアンケート結果を円グラフでまとめ、各図の下には、その結果と関連した自由記述（質問調査の他に自由記述欄を設けた）を書き留める（自由記述のコメントは原文のまま記載）。

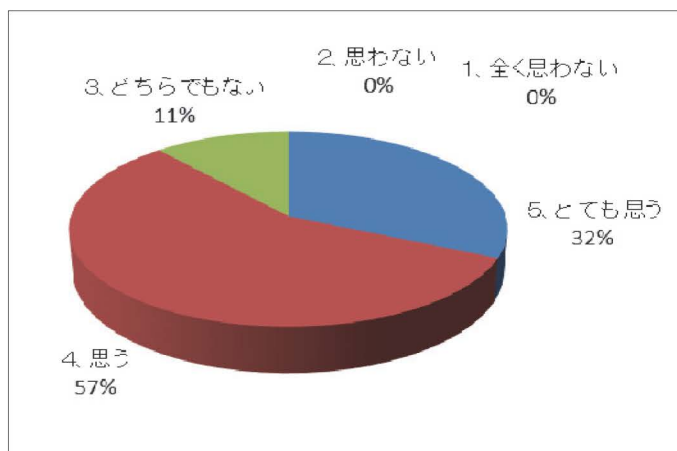


図1 アンケート 1：ピアノ伴奏の技術の向上を感じたか

- 「教職ピアノ実習」という授業のあったお陰で、ピアノを習慣的に弾くことができ、実習でもピアノを弾くことに関しては心配はなかった。
- 授業は、1人1台ずつ電子ピアノがあったので時間が有効に使えた。

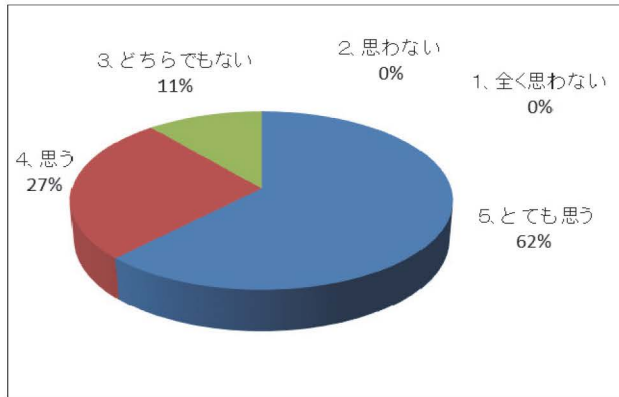


図2 アンケート2：教科書に載っている曲を勉強して良かったか

- 実習でも使用したので時間を無駄にせず実習の計画を練ることができたし、曲についてもしっかり勉強できて良かった。
- 教員採用試験の課題曲であり、受けようと思っているので良かった。

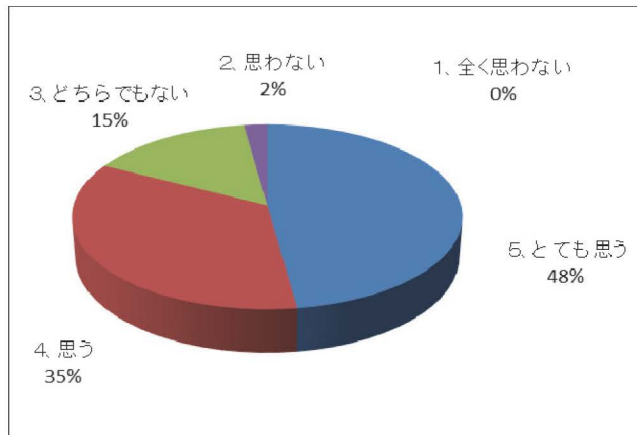


図3 アンケート3-1：グループ授業という形態について
ーアインザッツをスムーズに出すことができたか

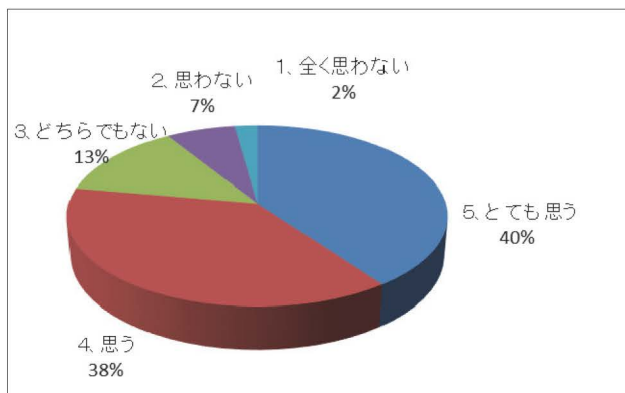


図4 アンケート3-2：グループ授業という形態について一グループの中で刺激を受けたか

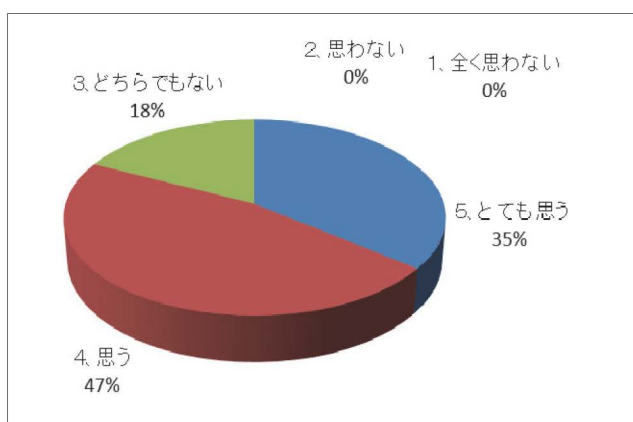


図5 アンケート4：実習の時に弾き歌いが生徒の前でできたか

- 歌わせることに苦勞した。自ら大きな声で範唱した。
- 弾き歌いが重要だなと感じた。

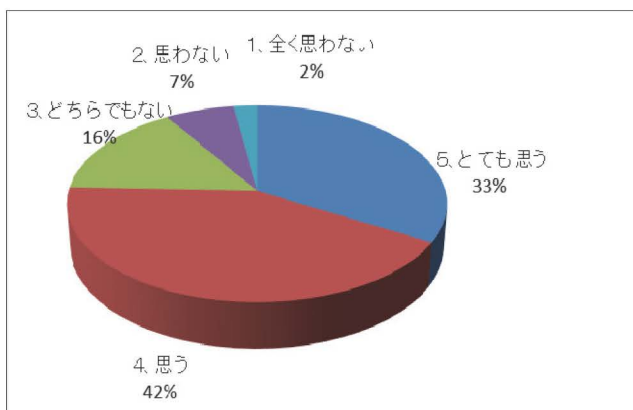


図6 アンケート5：授業や試験の経験で自信をもって実習にのぞめたか

- 実習は大学生でなく中学生相手だったのでとまどうことがあった。中学生を相手にして弾くことに關してのポイントや留意点を教えてほしかった。

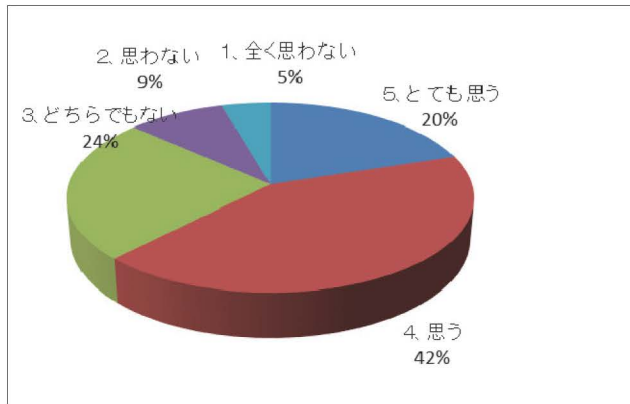


図7 アンケート6：簡易伴奏をつけることができたか

- 左手で簡単な伴奏をしながら右手でメロディーラインを弾くことができることが大切と実感した。(多数意見)
- どんな場面でピアノを使うかや、既存の楽譜にとらわれず、右手でどの声部をピックアップして弾くかなど、臨機応変さが何よりも求められる。
- ピアノが苦手な人に対して、ある程度省略して弾くコツを教えてもらえると新曲を譜読みする負担が減ると思います。

その他の自由記述

- ピアノを弾くことが第一ではなく、生徒を観察したり、範唱したりしながら、余裕を持った伴奏ができることが第一だと感じました。私自身伴奏に手一杯で、生徒の歌っている様子を観察することがほとんどできなく、とても反省しています。
- 中高生は、先生の自信の無さや不安な雰囲気を感じるので、自信を待って指導にあたれるような準備が必要だと思いました。
- なかなか歌ってくれないクラスもあるので、とにかく自分が積極的に大きな声で楽しそうに歌えることが大切だと思う。
- 「教職ピアノ実習」の授業では基本的にテキストを弾く、ということがほとんどだったので、コードを見ながら伴奏をつけたり、アレンジすることも授業で勉強できたら良かったのではと思いました。
- 立奏の練習をした方が良かったと思いました。
- ピアノの鍵盤を見ないで弾く練習が必要で、鍵盤から目を離す訓練が3年間でできたら良いかと思います。(多数意見)
- 初見演奏の練習の必要性を感じた。

5 おわりに

これらのアンケートの回答から、このグループ授業が教育実習に行ったときに役に立つようにという本来の目的を果たし、学生からも前向きにうけとめられていることがわかる。今後は、アンケートにもあるように臨機応変な対応や実践に使えるスキルを身につけるために、どのような手助けができるのか考えて行きたいと思う。それとともに、『教職ピアノ実習テキスト』が、学生一人一人のピアノ演奏技術の向上の糧になることを希望している。3年間のこの授業が、さまざまな分野で社会に出たときの自信やコミュニケーション能力につながることも願っている。

引用楽譜

全音楽譜出版社出版部編 1961『全訳ハノンピアノ教本』東京：全音楽譜出版社 (譜例1)

伊藤康英・尾形敏幸・生野裕久・滝口亮介編 2013『教職ピアノ実習テキスト My Heartful Songs』神奈川：洗足学園音楽大学教職センター (譜例2-8)